

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 金崎 由布子

本論文は、独創的かつ最新の考古学的研究法に立脚して、南米ペルー高地に所在するワヌコ盆地の紀元前二千年紀(アンデス文明形成期)に展開した人類集団の社会動態を明らかにした、完成度の高い実証性に富む意欲的な研究成果をまとめたものである。考古学的研究は世界中で実践されているが、その研究法は各地の研究伝統により大きく異なっている。人類学的考古学が卓越しているアメリカ大陸では、1960年代以降になると地域編年の方法として土器型式学の採用は衰退し、代わって炭素年代法がもっぱら採用されてきたが、金崎氏は系統セリエーションと階層分類に基づいた土器編年という画期的な土器研究法をあえて再導入し、先行研究では果たし得なかった時期の細分に成功した。

本論文は8章からなり、第1・2章では、研究の対象地域であるワヌコ盆地の地理的・生態的概要を紹介したのち、先行研究の解題とその批判的再検討によって研究の目的と問題の所在を抽出し、研究方法に関する諸概念とその具体を丁寧に整理している。第3章で当該期のアンデス遺跡の特徴である基壇建築の通時的变化を説明し、第4章で土器分析による編年研究を実践したのち、第5章でベイズ推定を用いた年代の解析(モデル年代の設定)という最新の方法により、その結果を検証している。続いて第6章では、上記の分析に基づいて、これまで2時期の変化とされてきたワヌコ盆地の遺跡変遷を、細分された4時期での変化として活写した。

第7章は本論文の結論にあたり、ワヌコ盆地に展開した地域集団の歴史的動態を、周囲の熱帯低地や北部高地等の集団との関係態の変化、あるいは社会階層化の進展過程として精度高く読み解いている。先行研究が果たせなかった通時的变化の詳細を解釈し得たのは、時期区分の細分だけではなく、地域間の土器製作技術の微細な差異から看取される影響関係の具体を分析することに成功したためでもある。土器研究を単に編年の手段として扱うだけではなく、集団関係を最も鋭敏に反映することを示し得たことは、今後のアンデス考古学的方法的転換に大きく寄与するであろう。ちなみに第8章はまとめにあたる。

惜しむらくは、社会動態の変化に関していくつもの斬新な解釈を提案した本研究ではあるが、土器分析に比して他の具体的証拠にやや乏しい点があることが挙げられるのだが、これは当該地域の調査事例の僅少さに起因する課題でもあり、本論文の意義を損なうほどのものではない。

以上より、本委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。